

伝統的な祭りにみる“地域力”に関する一考察

一和歌山県田辺市における田辺祭を事例として一

Study on the Local Potential and Capacity through Local Festival : A Case from Tanabe Festival in Egawa district of Tanabe City, Wakayama Prefecture

落合知帆*・小林正美**

Chiho Ochiai *・Masami Kobayashi**

Tanabe city has a summer festival that is celebrating the 450th anniversary in 2009. In this report, mechanism to deal with problem and sustaining the festival was studied, focusing on the Egawa fisherman's village where played a center role, by interview survey and participatory observation to understanding local coping capacity. To achieve a common target, the local people did spend time and the labor for preparation and sharing the physical load, experiences and problem, it helped to create a connection of reliance and the region. It was understood that various elements exist and are connecting to each other in different layers in the community.

Keywords: Local Potential and Capacity, Summer Festival, Sharing Experiences, Community Ties
地域力, 祭り, 経験の共有, 地域のつながり

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

都市部の一部や地方では高齢化や過疎化が進んでおり、町内会や自主防災組織の活動を行うことが困難な地域も出てきている。このような背景のもと、地域社会に既存する組織や活動を再評価し、地域に内在する問題解決や村落維持の仕組みを“地域力”として捉え直すことにより、具体的な計画や対策に生かしていくことが重要であると考えられる。

前回の報告¹⁾では、東南海・南海地震発生時に津波被害が想定される和歌山県田辺市の沿岸部において調査を行い、以下の4点を示した。

- 1) 沿岸部の3地区において、自主防災組織の活動状況とそれに関連する歴史のおよび社会的背景を整理し、過去に同じ津波災害を経験した近隣の集落であっても、地域特性(歴史的背景、職種、津波被害等)によって、防災に対する取り組みが大きく異なること。
- 2) 防災活動が積極的に行われていない地区に着目し、ヒアリング調査を実施した結果、当地区には、長い歴史の中で培われた漁村の地域性や日々の生活、伝統的な祭りなどによって育まれた“組”または、“向こう三軒両隣”単位の強い“地域のつながり”が未だ根強く残っていること。
- 3) 日常生活の中で密接な近隣関係が形成されていることにより、住民の生活行動の把握、被災経験の伝承、祭りなどの伝統的行事が継続されていること。
- 4) そして、それらを災害時の迅速な判断やその後の対応を可能とする背景として捉え、そのような特性を生む“地域力”が内在していること。

地域の近隣関係について日常的なつながりや行動を通して形成されていることを示した一方で、祭りのような行事の役割については、詳細に検討しておらず、非日常である祭りも地域力を形

成する基礎となっているのではないかと考えられる。

1.2 研究の位置づけ

これまで地域の祭りと地域の関係に着目した研究は数多くなされてきた¹⁾。また近年では、根岸ら²⁾によって祭りが地域運営に与える影響と変化をまとめた研究や、石川ら³⁾によって内発的発展の基礎的条件などを扱ったものがある。しかしながら、祭りを地域の有事の際の対応および防災の視点から捉えるためとして、地域に根ざした組織体制や仕組みの工夫、意識に着目した研究は限られている。

本報告では、田辺祭を担う一地域である江川町を対象に伝統的な祭りと地域住民の“地域力”に着目し、地域住民が祭りの実施に際してどのように対応し、維持しているのかを調査し、その仕組みや取り組みを“地域力”として再認識することを目的とする。加えて、祭りの非日常性という観点から、地域の仕組みや住民の意識を明らかにすることで、日常生活との関連について考察する。

1.3 調査の方法と期間

これまで2008年6月から一年間にわたるフィールドワークを通じたヒアリング調査や参与観察を行ってきた。加えて、2009年6月から7月にかけて田辺祭の準備期間中である1ヶ月前から当日まで、江川地区において、関係者に対するヒアリング調査(23名)及び参与観察を行った。参与観察およびヒアリング調査では、以下の4項目に着目した。

- 1) 祭りの活動とその役割
- 2) 地域のつながり・共同意識の形成
- 3) 祭り伝承と継続
- 4) 祭り期間中の対応および問題解決

*正会員・京都大学地球環境学舎博士課程 (Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

**正会員・京都大学地球環境学堂教授 (Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

2. 田辺祭の概要と運営体制

2.1 田辺祭の概要⁴⁾

田辺祭は、鬮鷄神社例大祭として、田辺市の旧町人町において例年7月24日から25日にかけて、一般には「御笠」とよばれる笠鉦(山車)が町内を巡行する。紀南地方最大の夏祭りである和歌山県指定無形文化財でもある。その歴史は古く、江戸時代から始まったとされ、町の合併や洪水による笠鉦の損失による変化はあったものの、その形式はほとんど変わらず今年450年目を迎える。笠鉦行列は、7町から8基の笠鉦と2つの衣笠が出て、各町内の法被を着た笠曳き、袴を着た高張提灯持ちらが町内を曳き回る。

木製の笠鉦には、各町が保管する人形が乗せられている。これら笠鉦と人形は通常公民館などに保管されている。祭り開始の儀式として、鬮鷄神社が保管している能面をつけることによって、人々の信仰を集める対象(カミサマ)となる。祭り期間中は、それぞれの町から選ばれた家々が「お宿」となり、カミサマを祀り世話役として役目を果たす。各町によって祀るカミサマは異なり、「尉(じょう)と姥(うば)」、「神宮皇后と建内宿禰(たけのうち)のすくね」、「恵美須」や「大黒」などがあり、それぞれに社会生活への教訓や五穀豊穡祈願などの意味がある。

祭りの準備は、6月の始めから顔合わせ、協議、お囃子練習、町内曳きなど様々な行事が行われるが、各町では、御宿を担う家の決定や笠鉦の曳き手の確保など前年の祭りが終わった直後から翌年の準備が始まる。(表-1参照)。

2.2 田辺祭における江川町の位置づけと運営体制

(1) 田辺祭における江川町の位置づけ

江川町には、笠鉦巡行の先頭を務める「住矢」という衣笠と「恵比寿」と「大黒」の2基の笠鉦がある。江川町は、浅野家が居城を造ったが大風雨により破壊されたため、対岸に城を築いたという歴史があり、この地域は田辺城下町とされてきた。江川町は、笠鉦巡行の先頭を務める「住矢」を務め、「七度半の儀式」では、6つの町人町の代表らが橋を七度渡り、江川町に対して先導および同行を依頼する儀式があり、江川町は田辺祭りにおいて中心的な役割を担っている。

(2) 実施体制

祭りの準備は、旧町人町の宮総代、町総代、当番町、田辺祭保存会や笠鉦協賛会など合同で進められる。毎年「御祭典笠鉦輿路及勤所並執行規約」が作成され、笠鉦巡行の走道はすべて事前に決められているが、実際には経験をもとに進められている。

それぞれのカミサマは、江川町にある各組が当番制で担当し、当番が4年に1度、順番に回ってくる。当番町は「組」総出で祭りの準備を行う。

江川町は8つの組に分かれ、各組に「三役」がおり、連合自治の体制を取っている。各組は約20世帯で構成されており、組内であればほとんど住民がお互いの日常行動パターンまで知る近隣関係を形成している。

(3) 御宿の役割

御宿は、それぞれのカミサマを祭り期間中自宅に祀り、お参りに来る人々をお世話する役目を果たし、祭り巡行においてもその

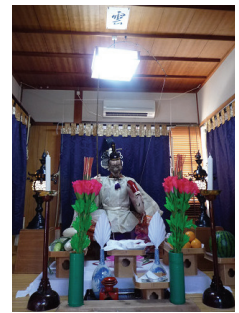


写真-1 御笠行列と「恵比寿」

表-1 田辺祭経過表(準備から当日まで)

月日	項目	出席者
6月6日	合同協議	当番町、保存会
11日	初顔合わせ	連合会、保存会、当番町三役、宮総代、各御宿、住矢指し、笠の内
21日	合同練習	連合会、保存会、当番町三役、各御宿、笠の内
23日	松の下見	
7月1日	当番町初審り会	
3日	鬮鷄神社御笠打ち合わせ	宮総代、町総代、御宿、各当番責任者
9日	合同練習打ち上げ	連合会、保存会、当番町三役、各御宿、笠の内、子供
11日	ならし宿 開始	
15日	笠鉦、松切りの儀	
17日	ならし宿、練習打ち上げ	
18日	会館、御宿、子供御払い	住矢指し、笠の内、御宿、子供
19日	宮よりお面受取り 御宿、笠鉦の飾り、橋端に登り吹き流しを立て、当番町は提灯を灯す 出陣式式の儀	笠の内、御宿、子供
21日	住矢指し、笠の内へ提灯 笠鉦飾り作り準備 曳き始め開始	住矢指し、全員、笠の内、御宿と役員
23日	流籠馬前ぶれ	当番町
24日	橋詰め集合、町曳き	御宿、笠の内、住矢
25日	睨参り、曳き揃え、町曳き 七度半の儀式開始、御面外し、笠やぶち	

組の代表となる重要な役目である。祭りは、期間中の御宿を決定することから始まる。どの家が務めるかを順番が回ってくる度に三役や町の役員が集まって決定し、依頼することが重要な仕事となっている。

祭りの御宿をすることは、家の誇りであり、大漁をもたらす縁起物でもあった。しかしながら、漁業の衰退や高齢化が進んだ結果、御宿のなり手がなかなか決まらないという。各組の三役や町内会長らが相談し、その年の家庭の事情や経済状況等を検討した上でお願いに行き、決定するとのことであった。

御宿を受けるということは、地域の一員としての役割を担うということであり、「お互い様」「町への貢献」という意識から担当を了承することが多い。町内の近隣関係を配慮する意識と行動がとられ、調整することにより御宿の役回りが維持されてきたといえる。御宿の決定に関しては江川町に限らず参加するすべての町において同じような傾向が見られ、御宿を公民館や公共施設に移す町がある中で、江川町では、各家が御宿を担うことが続けられている。このような打ち合わせや様々な準備が祭りの2カ月ほど前から行われる。例えば、御宿を担う家には提灯が飾り付けられ、御宿を示す幕が張られる。これらの作業も「組」単位で共同で行われる。

(4) 各家の負担

祭りに際しては、御笠とともに袴を着た組の役員や関係者と御

笠曳く役目があり、各家から1名を役に出す慣わしがある。このため、祭りの期間中は、地区外に住む息子や孫が帰省し、笠鉦曳きに従事しているケースも多く、にぎわいが戻る。「この確認を通じて、各家の家族構成や家族の事情、息子は近くにいいのか、孫は帰ってくるのかを組単位で熟知できる」との発言、「それが数年に一度の祭りの準備の度に再確認されている」（ともに町内役員）ということからも、各家の状況を把握するのに祭りが役割を果たしていると考えられる。

田辺祭りの祭典行事および準備は、多くの費用負担となる御宿に負担をかけないよう配慮されており、祭典行事の御礼や祝儀は合同会計より支出する取り決めとなっている。その費用負担は、基本的には担当となった組が行い、男性が参加する家（女性のみの家でも町外の息子等の男性が参加する場合もこれに同じ）は一代（数万円）、女性の一人暮らしの家庭は半代を負担することになっている。

また、町内では間口料として、200円から800円程度が間口の広さに応じて集金される。この際、各組の担当者が家々を回って集金し、御宿に渡すことになっている。

このように、田辺祭りは地域住民が代金を持ち寄り、御宿を支援する仕組みによって支えられている。

2.3 田辺祭りへの地域住民の意識

(1) 漁村の祭りに対する意識

江川町の漁師にとってカミサマ（神様）を祀ることは日常のこととして存在する。町内には恵比寿を祀る神社があり、漁に出る前には必ずお参りをしてから出かける⁹⁾。田辺祭りにおいても他の町が歴史上の賢人や権力者などの人物を祀っているのに対して、江川町では、「恵比寿」と「大黒」という漁師にとって大切なカミサマを祀っている。そのため、そのしきたりも厳しく、それぞれのカミサマに神社から預かった御面をつける際は、周囲を幕で囲い、その姿を一部の関係者しか見れないような慣わしとなっている。

また、町曳きでは、恵比寿、または大黒の人形を乗せて回るが、その御笠を持ち上げ回すのが、一つの見どころとなっている。しかし、「回し過ぎて怒られた」「カミサマが乗っているからもっと丁寧に扱え」（30歳代男性）ということから分かるように、祭りの勢いの中でもあくまで神事であること、大事なカミサマを祀っていることなど、御笠を回すという技術以上に江川町にとってこの祭りは神事という意味合いが大きく、お祭りの神聖さ、カミサマを大切にする気持ちなどが、このようなやりとりを通して若い世代に受け継がれている。

(2) 御囃子の伝承と意識の形成

御笠の中で奏でる御囃子の練習も7月中旬から始まる。御囃子は主に子供たちで形成され、それを指導する年長者層と青年層に分かれている。その音色は祇園囃子によく似ている。御囃子の指導に関しても地区で分担が決められ、毎日2時間ほどの練習を公民館で行う。練習では、正面に御囃子の主任が座り、後ろに地域の年長者達がずらりと並ぶ。御囃子の演奏には音符や楽譜などは無く、全てが実践しながら口伝される。祭り当日は、御笠の中央

部分に幕が張られ、その小さいスペースの中に6名ほどの子供達が入り、一日中御囃子を叩き、「はあ〜」「チャンチャン」という声と音を響かせながら町を曳いて歩く。

「昔は子供の数が多くて御囃子として笠鉦に乗れなかった」「これに乗って御囃子をするのはうれしかった」（男性50歳代以上多数）というようにお囃子の一員となり、笠鉦の上で演奏することは地域の子供達にとっては優越感を味わえる時であり、あこがれの存在でもあった。御囃子の役割や祭りに参加するという気持ちの形成を通じて、子供の頃から地域の一員としての認識や祭りを維持する意識が形成されていくことが推察される。

3. 田辺祭り当日にみる江川町の“地域力”

ここでは、祭り当日の活動に着目し、地域住民同士の世代間交流等に見られる人間関係の形成、祭り運営の工夫、問題解決等を通じた「地域力」について考察する。

(1) 笠鉦巡行

木造の笠鉦は約1トンの重さがあり、これを約12人で曳き回る。曳き手の年齢は30-40歳代が中心だが、20歳代から80歳代までいる。途中急な坂道があり、その際は勢いをつけて駆け上がり、厳かな行列の中にも勢いを感じる。各御宿の前では、笠鉦が向きを変えるが、路地が狭く屋根がせり出しているため、その度に電柱や家の屋根にあたらぬように地域住民皆が見守る。時には、笠鉦の屋根がぶつかり瓦が落ちたり、しめ縄を引っかけてしまい、その度に周りから「右、右、右、引け、引け」や「ゆっくり、ゆっくりやれ」などの声飛び。その掛声を目安に曳き手は自分たちでは見えない屋根の部分ぶつけないように調整しながら、笠鉦を回転させていく。笠鉦のどの部分を担当するかによってその重量や付加は異なるが、男性10人掛りで真っ赤な顔をしながらかつ縄を引っ張り、笠鉦を支えている。休憩はあるものの、ほとんど2日間笠鉦を曳きながら歩き続けるため、かなりの重労働であることが伺える。また、袴を着た三役や町の役員らは御笠の前を歩き、役員の家の前でしゃがみ、御神歌を詠みあげ、笠鉦をサポートする。このように同じ「組」のほぼ全員が一つの笠鉦とともに炎天下や大雨の中を歩くことは、男性であってもかなり体力的に厳しいものであることが分かる。しかし、このような厳しい体験を共有することで、お互いを認め合う関係や一体感、「組」としての連携・連帯が生まれると推察される。加えて、祭りを通して日常にはない重労働や車輛の取り回し、町内の物理的障害の認識などを認識し、経験していることが分かった。

(2) 町曳き

高齢者の方々は御笠の町曳きを心待ちにしている。御笠の町曳きは、事前練習、初日の午前、二日目の夜の3回行われる。町内の高齢者や家族は、朝から家の前に椅子を出し、御笠が通るのを炎天下や大雨でも、ひさしの下でずっと待っている。これまで田辺祭りという地域の祭りだったものが、夜の町曳きの際には、それが一段と町のものとなる。町曳きが始まると、子供を連れて地域の若い住民またはその家族が御笠の後について歩き、あちらこちらで同窓会さながらの雰囲気になる。若い母親たちが同世代に子供の成長を報告し合ったり、その高齢者が幼わり微笑みかける

光景があらこちらで見受けられた。

祭りに対する地域住民の意識を聞いたところ、「この祭りに誇りを持っている」(20歳代男性)や「子供に祭りに参加させたいので、この時期だけ学校を編入し、お雛子の練習に参加させている」(30歳代女性)など祭りに対する心意気や伝統を継続させたいという気持ちが聞かれた。また、「毎年楽しみにしている」(住民多数)や「お笠の後ろをずっとついて歩く」(小学生と30歳代女性)、「後ろをくっついて行列しながら歩く、同窓会のよう」(30歳代女性)という発言からも分かるように、祭りを通じて地域の人々の交流の場が作られ、地域のつながりが形成されているきっかけになっている。

(3) 問題解決と役割分担

祭り当日、ある組の提灯持ちを予定していた中学生がインフルエンザ問題により学校から祭りへの参加を自粛するよう連絡があった。その組の三役は、他校に通う中学生の家を訪れ、提灯持ち3名の確保を頼みに行った。その中学生は友人らに電話をし、3名の確保に努めた。その間、三役達は玄関先で待ち続け、その間もあちこちに電話連絡を取り、状況の説明や情報交換をしていた。結局中学生が自分も含めた3名を確保し、三役達に伝え、一見落ち着いた。この事例から、組で発生した問題に関して、組長が一人で対応するのではなく、三役が共に問題を共有し対応する姿や、町内として協力する姿があった。

前述の間口料回収の際にも組の三役のうち二人が一緒に各戸を回ることで、透明性を確保し、住民間に起こりうるもめごとを避ける工夫をしていた。

他にも慣れない袴の着付けを高齢の女性に頼んであり、女性もその役割を楽しみにしていた。このようにして様々な問題に対応して、年齢や性別は無関係に出来る人や解決できる人に頼むという協力の仕組みや近隣関係が見受けられ、このようにしてこの地域では問題を解決し、地域を維持してきたと推察された。

さらに、祭り最終日の交通規制の際、警察が笛を吹いて歩道へ上がるようにとの指示にはほとんど動かなかった住民が、町の三役や役員(袴を着た人達)が提灯を誘導灯がわりにして「車が来るぞー」と言うと、これまで笠鉾を囲み道路に人があふれだしていた住民が車に道を開けるという光景が見られた。このように、地域のルールや秩序を保つ人間関係や統制は祭りを通じて発揮されていた。

4. まとめ

このような地域密着型の祭りでは、伝統的祭りの意義として挙げられる、神への祈祷、地域の伝統、村の共同体としての共同意識の形成が生活に密着した形で行われている。

「ここでは田辺祭りを中心に一年の計画が立てられる」(町内会役員)の発言のように、江川町にとって祭りが地域生活の中心的な役割を果たしており、また伝統文化の継承、地域交流、共同体の意識の形成が祭りの役割として大きな位置を占めているように推察された。

「組」という近隣組織において、祭りの経験が共有されることで共同体の意識が形成され、祭りを通じて地域で培われてきた伝

統や知恵が次世代に伝えられていた。また、祭りに関連した様々な作業や準備を通じて、世代を超えた協力や問題回避の工夫がなされており、祭り当日においても問題を組や町内で共有し解決していた。この祭りを通して、江川町に内在する“地域力”の一端として、様々な問題や状況を地区や組単位で共有し、対応していくという問題共有型解決を取っていること、年齢や世代に関係なく出来る人がやることで責任感や信頼関係の構築がなされていること、経験の共有によって信頼の形成と伝統の継承を行っていることなど、長きにわたり培われてきた問題解決や村落維持の仕組みを確認することが出来た。また、これらは、様々な要素や仕組みが複雑につながりながら存在していることが推察された。

祭りという行事を共同目標として達成するために、地域住民は時間と労力を使ってその準備と実施を行っている。そこに次世代を超えた人間関係の構築とそれを維持するための仕組みが形成されていることが分かった。

日本の各地には、歴史・伝統のある祭りが様々な形で残っている。祭りは本来、日常のしがらみから解放する機会であり、大勢の人の参加と熱気によって非日常を作り出す機会でもある。それらをいかに運営、維持してきたかに非常時における対応の知恵や仕組みの学びがあるのではないだろうか。

「この地域では何かがあったら自分たちで対応してきた。たとえば火事があれば、みんなが湧きつけて、家の中の物を外に出したり、火を消したりする。その時の行動力といったら凄い」「ここはみなもともと漁師なので、とにかく連携して何かを行うということに慣れている。長けている」(祭り役員)との発言が祭りの興奮の中であった。祭りや火事という緊急事態における対応は、日常からの関係や祭りによって形成されたものの延長線上にあることを住民自らが認識していることをよく表している。

今後は、このような非日常的な機会のために、地域住民はどのように対応してきたのか、またそこに内在する地域の近隣関係や地域安全の仕組みの形成など地域の有事の際の対応および防災の視点から分析していきたい。

謝辞

本研究は、田辺市江川地区の住民の皆様の全面的な協力を得て行ったものです。ここに記して謝意を表します。

補注

- (1) 祭りと地域社会を扱ったものは多数あるが、ここでは地域社会の形成や共同体や組織に視点を当てたものとして、松平(1990)「都市祝祭の社会学」、芦田(2001)「祭りと宗教の現代社会学」などを参考とした。

参考文献

- 1) 落合知帆、原口統、小林正美「自然災害に対する“地域力”に関する一考察—和歌山県田辺市沿岸部集落を事例として—」(社)日本都市計画学会都市計画報告集No. 8, 2009年5月, pp. 38-41
- 2) 根岸亮太、後藤春彦、田口太郎「祭事が地域運営に与える影響に関する研究—埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として—」日本建築学会計画系論文集第622号, pp. 129-136, 2007年12月
- 3) 石井仁生、木下光、丸茂弘幸、長友伸介「運営形態からみた西条祭りの内発的発展の基礎的条件に関する研究」都市計画論文集 No. 38-3, 2003年10月
- 4) 「田辺祭 笠鉾巡行」田辺笠鉾協賛会パンフレット
- 5) 落合知帆「江川町ヒアリングノート (2008年6月-2009年8月)」